
恋する臓器

LIDY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する臓器

【Nコード】

N6330A

【作者名】

LIDY

【あらすじ】

貴方がいなければ私は幸せだったかも知れない。嫉妬、羨望、渴望、葛藤。貴方が与えたのは醜い言葉。それでも私は貴方を好きだと言う。叶うか叶わないか解らない恋だから私はそれを欲しいと思う。

第1話：日差しさんざめく

私は雨のあとの日差しが入る瞬間の図書館が好きだ。

黴た書物、乾いた空調のきいた空気、静かな人々。

無遠慮なのか、謙虚なのかビニルの椅子をテラテラ照らす光を私は愛して止まない。

私は読みかけの本を机に置いてそっと考える。

けして考え方を間違えないように、そっと、まるで壊れかけたアルバムをたぐるように。

彼が笑っていた言葉。

彼が興味があるといった事柄。

私は彼に伝えられていただろうか。

つまらない話ばかりをしてしまっていなかったかしら。

ふと私は私の中でうごめく何かを感じ、そっと呼びかけた。

この心臓よりも下できゅっとなる臓器はなんなのかしら。

あなたを思えば、その存在を顕示するこの臓器、息が詰まるようなこの感覚を誘う臓器を私は知らない。

それはいつの間にかあって、後天的に出たものかと私は思う。

第2話：追憶は静かに

私は考えるのをやめてそつと溜め息をついた。

彼に会える時間まであと一時間。

ドクンドクンと心臓が打つ。

何かをしても手につかないことはもうわかっている。

読みかけの本は唯の原子の集まり。

例えそれを集められた文字がどんなに魅力的だろうと、読みたいと思っていた内容でも。

彼を思う一瞬には敵わない。

締め付ける痛み。

私は其に酔う。

そして彼が触れた箇所を思い起こして私は目を閉じる。

一目惚れです。と告白した際に言うとは彼は苦笑した。

意地悪な笑顔。

刀で斬っても斬れないと形容したのは誰だったか。

どう答えればいいか、わからない。

彼はそう言った。

意地悪な返事だと思った。

好きになつて下さい。

私にはそれしか望みはないのに。

喉がカラカラになる程望んでいるのに。

好きになつてで好きになる程惚れっぽくはないかな。

じゃあどうしたらいいの。

好きで好きで堪らないのに。

じゃあ、好きにならして下さい。

彼はそう言つてまた苦笑した。

期限無期限で方法は自由、どう？

そんなの、聞かれても困ります。

貴方が好きなのに。

弄て遊ばないで。

期待していいのか、遠回しに断られてるのか、解らなくて、私は胃がきりきりと痛むのを感じた。

私の胃は臓器の中で一番センシティブだ。

心が痛みを感じ言葉にする前に、キリキリ痛みが襲う。

もしかしたら貴方を思った時に痛むのは胃なのかも知れない。

それはなんだかロマンチックではない。

私はキリキリ痛む胃を押さえて座り込みたくなるのを抑え彼をひたと見つめたまま、どうすればいいか必死に考えた。

先輩と遊びたい、です。

まず貴方をもっと知りたい、知って欲しい。

あわよくばほだされてくれないかしらと思ひ私は言った。

いいけど、お金ないから家くる？

頭を駆け巡った考えには敢えて蓋をした。

唯その時は貴方を知りたいだけだった。

第3話：センシティブなストマック

床に積み上げられた、本。
狭い部屋。

流しに置いてあるマグ。

そして、濃く濃く濃密に香る貴方の匂い。

先輩がしれっと私に囁く。

汚い部屋ですが。

確かに綺麗とは言い難い。

私は笑って首を振りそつと部屋に滑り込んだ。

星が好き、だといってた。

本棚の上のプラネタリウムをみて私は記憶と現実を合わせていく。

なんで辞書がこんなとこにでてるんですか？

一番手の届く場所には、大辞林が。

色々役に立つよ？

なんのですか、と笑いながら鞆を隅に置く。

近くにある体温に皮膚がちりちりする。

触れたい、知りたい。

はしたないと思われるのはしゃくだけど、ただ知的探究心が旺盛な

だけ。

黙って、お互いの時間が過ぎる。

何を話せばいい？

他愛いない話なら誰とでもできるけど貴方とだけの話がしたいの。

触れようとする手のひらに心臓が移動したかのように脈打つを感じる。

じる。

変なの。

あれは原子の塊で有機物で、人間という動物で唯の雄。

統計的には雄の方が雌よりも多くて、つまりありふれてるってことで珍しくもなんともない生物なのに。

五臓六腑が全部ザワザワしてる。

相変わらずセンシティブな胃は痛みをキュウキュウ訴えるし、呼吸
気管はまともに機能しない。

あたしの躰は欠陥品の寄せ集めなのかしら。

こっち来ればいいのに

彼が笑う。

心臓がどこにあるかわからない。

お邪魔します。

そつと彼の横に座る。

彼の指が戯れるように私の肩を引き寄せる。

始めてじゃないのに。

初恋は終らせたし、先輩には言えない位恋してきたのに。
私はまるで生娘みたいに、どうしたらいいか悩んでる。

流される子だなあ。

意地悪ばかりいう、人だと思った。

先輩が、好き、だからです。

どうしたらいいか、どうすればいいか、わからないの。
それぐらい好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6330a/>

恋する臓器

2010年12月8日02時07分発行